新千載和歌集

上

853
166

函號 二架
書名 二十一代集
冊數 五六
類 和歌 七七八

國立國會圖書館

タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

再入萬葉集歌　春上三　春下一　秋上一　秋下一　巻一四　巻二十

巻三二ウ　巻四四ウ　雑上一ウ　雑下一ウ　長哥　合廿九首

誤入歌

新千載和歌集巻第一

春歌上

春立心をよみ侍ける

1 まつ人に君けのやどの梅の花

春ともしらぬ雪ぞ散ける

皇太后宮大夫俊成

2 春ふかみ霞の衣ぬきをうすみ

花のかゝらぬ山のはもなし

法印慈円

3 ふる雪の跡なき庭の春草に

ふみわけてとふ人もあらなん

後京極摂政前太政大臣

4 春たてば花とや見らん白雪の

ふりかゝれるる園の柳

後鳥羽院御製

5 ふる雪のみよしの山はいつもかく

ふもとの里は春の曙

前大納言為家

6 春の来る山のかひよりうちなびく

霞の末に残る白雪

皇太后宮大夫俊成

7 春の来ぬ中みの

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

浦妻も波のそこなる浦もみん底の物なれや浦の浦

文保三年百首奉

前中納言為相

もろ刀やそうら底なる浦おさえ刀浦の玉ぬ的なる

光的業平の道おおぼえ下

野ら波

和田原底もいさ刀浦の松ささめ浦風ゆうく万

恵慶法師

いさりそうら舟おまく人ぬ浦風ゆうくうら

敦安元年亀山殿百首奉

権中納言公雄

去れ名吹く四の浦の朝なぎ

野ら寸

うらめしさ里ぬそむる浦なれや

寂光院入道前宮白河殿

文保三年百首奉

前中納言為相

もろ刀やそうら底なる浦おさえ刀浦の玉ぬ的なる

光的業平の道おおぼえ下

野ら波

和田原底もいさ刀浦の松ささめ浦風ゆうく万

恵慶法師

いさりそうら舟おまく人ぬ浦風ゆうくうら

敦安元年亀山殿百首奉

権中納言公雄

名れく係そうさんん
底のうのおうそうみ
ふそうて的

浦妻も波のそこなる浦もみん底の物なれや浦の浦

文保三年百首奉

前中納言為相

もろ刀やそうら底なる浦おさえ刀浦の玉ぬ的なる

光的業平の道おおぼえ下

野ら波

和田原底もいさ刀浦の松ささめ浦風ゆうく万

恵慶法師

いさりそうら舟おまく人ぬ浦風ゆうくうら

敦安元年亀山殿百首奉

権中納言公雄

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

ゆきてみむ志賀の浦風吹きこすな
ねおひしかれもろともにくる
志賀の浦や遠ざかりゆく波の間より
ひくふねをしらずもあるかな
志賀の浦や遠ざかりゆく波の間より
みるめをわけてこぐふねのあと

題未

志賀の浦や遠ざかりゆく波の間より
山路へ通ふ花の白雲

古

志賀の浦や遠ざかりゆく波の間より
ひくふねをしらずもあるかな

前大納言公任家

三月三日曲水の宴に

源俊頼朝臣

志賀の浦や遠ざかりゆく波の間より
山路へ通ふ花の白雲

前大納言公任家

三月三日曲水の宴に

久我内大臣

永保四年内裏歌合に

九重の宿のうちにひくねをも今ぞやまじる
吹上の浜

承暦二年四月前斎院十首歌合に

ほととぎす二声三声なきしより
あやしき空をながめつるかな

大納言公実

元亨四年二月後宇多院十首歌合に

時雨ゆゑ山路の紅葉散りはてて
峰の松風ひとりこそ吹け

前参議教長

暮れぬとて帰る山路の木の葉ふり
ふかき跡をも埋む白雪

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

福恩寺前関白内大臣
秋葉
秋葉

建武二年内裏にて人々歌とりて
ける時春動物という事を

前大納言実教

前大納言為氏

前大納言公任

家集三月ばかり花の
枝をもちてつかはすとて

おなじ

家

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

前大納言為家

冬枯のこずゑをそよと打ちなびき
　風こそ吹
後京極摂政家六百番歌合に

寒風

寒けくもみ雪ふりしくみよしのの
　山の冬木に花ぞ咲ける

同三年後鳥羽院御時
　和歌所にて古今集の
　歌ども書き改めさせ給ひけるに
　春歌の中に

後宇多院御製

春立つ日

ふるさとの山里かけて我よそに
　古ぬる今日の梅の
　里を后宮
　　文保百首

中宮亮公宗母

梅の香も昔の袖の移り来て
　山里かけて匂ふ春風

六条内大臣

春雨も濃やかに降りて梅の花
　匂ひの袖の墨染の色

三月尽の中に

後伏見院御製

春風のそよと吹くにも宿のあるじ

春山深雪といへる心を

ゆくへなき雪のみ深き山里に

春をも知らで梅の花咲く

前大納言為氏

ふりやまぬ雪を風のたもとにて

吹くる夜半の梅の香ぞする

前大納言為氏

梅花満室といへる心を

杜門閉親里家の六十首の中に

源惠氏朝臣

吹く風のうちぞ香ぞ梅の花

咲きて雪ふる夕暮の庭

前大納言為氏

梅花満室といへる心を

ゆくへなき雪のみ深き山里に

春をも知らで梅の花咲く

伊勢大輔家

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

みち雪のうねし梅花

百首哥たてまつりし時

さくら花のもとをよめる

正中二年七月廿七日うへのをのこども歌をそろへて
百首哥つかうまつりし時初花をよめる

按察使源清輔朝臣

をりつくる春のしるしをみつる哉
散ぬる後の名にもなせれば

中務

三条院の御時の歌合に花のもとにて

等持院贈左大臣

さくら花ちりぬる後の山風に
香をたづねてぞ春をしるべき

法印長舜

花をのみ春のしるしとみる哉
遠仁元年二月廿首哥合に

寂蓮法師

花ゆへにやどをこゆる春の日を
暮ぬとかへる山ぢをぞうき

二條院讃岐

風ふけば花のあたりはさえもせで
雪ちりかかる春の夜の月

藤原範永朝臣女

行源法師

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

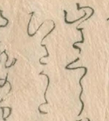
拾遺集 巻第十 雑春 雑秋 雑賀 雑下 雑上
拾遺集 巻第十 雑春 雑秋 雑賀 雑下 雑上

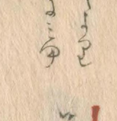
春歌下

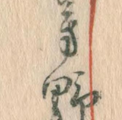
花園院御製

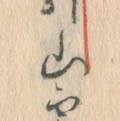
後朝花

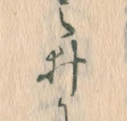
後朝擬雑十

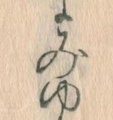


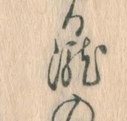


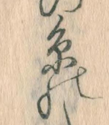


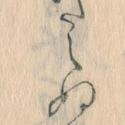


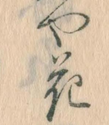


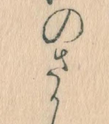


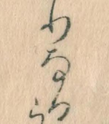


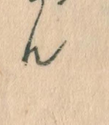


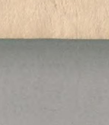


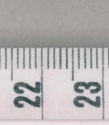


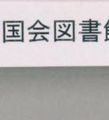












国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

拾遺集

支藩

家集ヤマ葉

坂川

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

建永元年二首会

暁風ハうらみハ
海花を吹給
暁風のおさまれる世ハ
花園院御製

春風ハ吹とも
建仁二年三月
時雨哥

二三月おもしろ
男の世を来の秋と
そうらうも
うう

春風ハ吹とも花よりほかに
おもしろうそうらうも
うう
大庭尉の妻
みうとうとう

摘花ちりもしく久う
詠哥
活二位成実
前大納言為忠
活二位家隆
高砂乃松のみどりハつまなくて
文保百首兼好法師
暁ハ
白ひさの風のたよりを
前中納言雅孝
暁ハ

百首の中　時花　前関白

さもこそはいとゝみうきみの山花の木しいそたゝん

おもひ

ある夜朝臣

花みやそ古ゝゝ

花易散と云ことを

ちるうへはみさらんこそ風の吹まゝ山さくら哉

依花約人

殷富門院大輔

さくら花のたちよる人まちえてをるかひもあるへき花

権大納言通方卿家

花ゆへに春の心はのとけしと思ふ人こそうかれ

藤原義孝

櫻花まつ見ぬ程の春ならは

猶大納言延光

いつもをそ花のこゝろのあさからぬ

寛治二年百首歌奉りける時櫻花

冷泉前太政大臣

あらしふくまつ見ぬ程の櫻花

大宮前太政大臣家百首歌よめる

前参議教長

春ふかくこもりおほせてみんとおもふ花のかけ

をぐらやのこんもり山
をぐら山かしみを花のそら
それなりをぐらを山さくら
　　従二位為子
やまてこそ心けの山乃桜
白やにほふる春の山桜
色もことまれそかひなき花さくら
　　津守国助女
古
ちとせいとのくもれる
神のこふ
今年春
百首
百首
百首
大和の
大和

みよ野の野野の桜
今更
雪とのみ花の
　　為通朝臣
雪とのみ花の
　　新大納言隆述
後徳大寺
京極の御息所

宿廿一首 ○

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛元二年三月三首会
春ごとのことをよろこぶ
延喜御時歌合 籬菊
藤原敏行朝臣
籬の菊にをきまがへたるつゆのいろ
よみ人しらず
雲間野の萩
よみ人しらず

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

後拾遺集巻第十七 雑六

文保百首の中に

法二位宣子

初もみぢ雲の錦も思ひ知れやがて時雨の袖の上かな

百首の中に

御製

ちりまがふ花の行方をたづぬれば雲のうへまで風ぞ吹きける

春花を

大納言顕實母

春風をまつと知らでぞ散る花は思ひ入れぬ人ぞなきける

貞和二年百首の中に

前大納言公明

春ごとに花のおもてを見るものは千歳を経ても飽かぬなりけり

元徳二年百首の中に

中納言朝忠

春ごとに花のもとにて契りつつ幾世か人の老いをへぬらん

元応二年百首の中に

皇太后宮大夫俊成

いくかへり雪と花とを詠めつつ我が身ふりぬる名をも知るかな

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

夏哥

百首哥たてまつりし時

前大納言為定

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166　　ガラス使用

けるに

おそくまで侍りけるあかつきに

延喜二年百首奉りし時

春

ふるさとのよしのの山の桜木を

神山の麓下草ゆくゆくや帰を待らむ

百首歌よみけるに

進士内親王

夏

夏山の木の葉をとめてそれぞとも

等持院贈左大臣

秋

秋萩の下葉もうつろひぬ

賀茂社にまうでけるに前斎宮より移時に

源邦長朝臣

難波潟みるめもなしや

敦忠朝臣

逢坂の関の清水に影見えて

源二源流泉

古

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

文保百首奇生りもの時

後照念院殿御製太政大臣

嶋もりてねはかうへ郭公老くちなしの声

前大納言為兼卿

の中よ

ほとゝぎすのこゑあしかきてそこのくちなん

後宇多院南禅院よおさへ御うりなり御

郭公をいの事を頭そよませおもふ

うまうりもの

元徳二年

きしかたをみてもうれしき山乃うひの事をへりもん

後醍醐院御製いまさら此の事申もの時くて

さうて面そ事うみ給もおぼえ

権中納言具行

かうしうりものやうなりてやうなりてやうなりて

第六納言為世卿日社の会
よや郭公
祝部成久
ほとゝぎすなくやさ月のあやめ草
枕もしらぬ契をぞ思ふ
前参議雅有
いく里の夏を経てかはつかりの
永嘉六年殿上会の時
雲井まで声をかぎりに郭公
後次第也
の万代三南山之
なくやおそきと人のまつらん
春宮の御
二条右大臣
郭公なをおろかなる声もなし
聞ゆる時はあかぬ心を
第六備中権守
里ちかくなりぬと聞ゆる時鳥
平維貞朝臣
なくこゑをたのめてくらす夕暮は
民部卿為相
ほとゝぎすかつ聞初る初音より
あやなく人の待れぬる哉
永元二年百首奇
郭公なくや五月のあやめ草
前中納言為相
ほとゝぎすなくこゑをたのみてくらすむなしき夕
百首奇
郭公なくやさ月のあやめ草
師氏

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

神の香ハ花ぞともなふ

前中納言定家卿

合しわたる時おもひ

ゆくえ世のつみおもふ

正中二年百首奉

たちばなの匂ふやみ

百首奉

等持院贈左大臣

雑歌の中に

神風ハ

建武二年内裏

つくまもる時

入道前太政大臣

貞和二年百首奉

陸奥門院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前中納言定家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

家に百首歌よみ侍りけるに、海辺の恋の心を
（古）
前関白太政大臣

みるめかる人の袖こそ浦風の吹きかへすなる
文保三年百首歌奉
（伊物）

藻塩焼く煙ばかりぞ
（古）

みるめかる人の袖こそ浦風の吹きかへすなる
文保三年百首歌奉

藻塩焼く煙ばかりぞ

あま人の袖こそ浦風の吹きかへすなる
（伊物）

藻塩焼く煙ばかりぞ

あま人の袖こそ浦風の吹きかへすなる
（古

右大臣

正治二年百首奉
[illegible]

[illegible]
[illegible]
百首奉
[illegible]

久堅の
[illegible]

参議雅経

[illegible]
[illegible]

前大僧正
[illegible]

[illegible]
[illegible]

元亨三年八月十
[illegible]

後宇多院御製

[illegible]

入道前太政大臣

[illegible]

前大納言為世

[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

頌しらす　　津守国助

こりしきの山のまつらくもかゝりあへす庭もせに

あつさういろの山なみやふかきみとりをそふる

夏山の鹿のこゑこそ秋もしるうへのをのこともこゝろ

照射をよする世おもふ　　権中納言俊忠

おりすくるふかき山のけさ秋をうへもすゝしき

伏見院御製

百首の中に　　大納言頼実母

稀なるそよもの宮ゐをくもの影のみてこゆらん

あれ元百首奉めされけるに

深夜多流水

夏ふかみ月もさしこぬ山水のそこにも宮ゐ

郭公

藻塩の流おもみ

水の面なるのこゑのみをくたかうらん

庚申年六月俄に

久しき水色雲とゐて

雨大納言實夏

朗詠
草もかれ水もこほれる冬の池のそこまで月はすみけり

冬

行つゝ人のこひや渡るらん
　　朝ら寸　津守国冬

あれはての浮寝の波も風さえて氷に月の
六帖　　明ける

夜草のとまもる里の犬の声
　　三条入道前太政大臣

里人も我もむかしの伊勢の海
　　徽安門院

物あらく我のみ波のまくらまで涙もかかる
　　従四位親重家集

人丸の山のしたゆく水のうもあへものもるみ
　　前大納言為氏

文保百首冬

常夜灯花ありせいと心ありの
　　文保百首冬

里人も我もむかしの伊勢の海を人ふるまで一
　　三条入道前太政大臣

夜草のとまもる里の犬の声
　　徽安門院

物あらく我のみ波のまくらまで涙もかかる
　　従四位親重家集

人丸の山のしたゆく水のうもあへものもるみ
　　前大納言為氏

文保百首冬

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

六月ばかりの月前納言為世

樹陰夏月といへる事をよめる

久堅の雲ゐいつくの影ぞとて
　あふぐ扇に宿る秋風

いつくとも山のたえまをたどりみん
　月の
元亨三年八月十五夜の歌合の時
十首の内なり

百首哥奉りし時納涼

前大納言為家

夏ふかくなりぬる宿の夕すゞみ
又永四年内裏の哥合に夢中徹通といふ
ことを

九重も風や涼しくすまるらむ
海士の苫屋の夕暮の空

従二位行家

人丸

二句 いく

清らなる山のふもとの泉あり
すゞみの客や幾せ来ぬらむ

中務

家 朗詠

さゝくれば水も木ずえもすゞしくて
夏ぞ人めもなくなりにける

大納言為家

山深み木下闇なる夏の夜も
月をば宿す泉なりけり

大和物語

前中納言匡房家哥合に納涼

権部行親

まくず原風吹くごとに秋来ぬと
葉うらみがほの露の白玉

元仁三年三月廿九日

従二位行家

池水河添ふ流ありとも見えぬかな
秋のしるしを風の吹かば

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

秋歌上

秋の始めの心を　延喜御製

ことしより秋風ふくと　あらかじめ　萩の葉そよぐ　夕暮の空

秋の始めの歌　院御製

風ふくと　袖こそまづは　知られけれ　まだ見ぬ秋の　夕暮の空

秋の始めの歌　法皇御製

ふれば又　風のみならず　ながめつつ　物思ふ袖に　秋ぞ来にける

文保百首の時

秋歌

いく夜ねぬ　やみうきものと　今さらに　古　なれ顔なる　秋の月かな

寛治二年百首の時六月秋

皇太后宮大夫俊綱女

山賤の　あれたる宿の　ひまがほに　秋の色なる　夕風ぞ吹く

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

貫之集
六帖before之
家持集

家持のうた古風ありと
いはむも思ひてこれに集
めつ

家
おもの河あきはぎ浪
後撰雑四出　読人不知　乱れ
元慶二年七月廿日　七ちて咲
七夕の夜よめる　　紀友則

天川こよひの風に
吹きそへよ
秋待つ舟の
かぢの葉に
かく

又
天川こよひの舟の
かぢの葉に
いく秋かきつ
る言の葉
七夕歌

天川こよひの雲の
うへまでも
風吹きわたる
秋の夜の月

又
天川こよひの雲の
うへまでも
風吹きわたる
秋の夜の月

題しらず　　左京大夫顕輔

万葉にも七夕を天
製歌ともよめり
続述日本紀にも
しるしたるもの
へし

○地祇部

七夕のおもしろき夜と
文保二年七月七日
もの時七夕地祇と
民部卿為藤

天川あふせはたえもはてなくに
文永八年七月七日　故
なりて今はわたるもあかさの　小大君
後法成寺入道前関白内大臣家

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

仁和のみかど時うつりて後人のよめる

ときわなる野よりつづきてたのまれぬ
ときわなる世なれども

新宝集
秋 新古今集下

寛平御時后宮歌合に

後徳大寺左大臣

年ごとにふる人のうゑおきし
秋はきもみぢ山のおくにも

古

寛平御時后宮歌合に

後徳大寺左大臣

秋ごとに神なびやまのもみぢ葉の
ちりてたれをかまつの下露

建治二年九月十三日関東申
されける時山門とりわき
訴訟を
贈太政大臣実基 春宮大夫実
兄の前右近衛中将
元亨三年正月廿六日
民部卿為藤
兄の山乃もるく成ぬる月
暦應三年八月十六日新
なる時月おしとやおもふらん
法皇御製

やもめ住乃山松ものさひしきに
元亨三年七月関裏
述なる時和歌
雲もる夫須宮井の雨やとる
月ナ前ニのよを世ゝ中ニ雲乃絶間
と云事をよめる
伏見院御製
吹もる風も月も物凄
影うつる
中文室公家
なからまてやもる月のうき秋の雨

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

前大僧正慈禅

一年のやそ社ふるもみぢ葉の新かさ山の秋の月

前大納言為家

風さそふ夕のやそ社ふるもみぢ葉の新かさ山のそれもちるらく

前大納言為家

雲かくす尾上の松を出うめくみづのえとよる月影

権中納言経定の家の合月

雅家光吉朝臣

雲晴て又とりのやまとよむ月や天津乙女の袖ならん

建長二年八月十五夜和歌所にて池上月といふことを講ぜられ侍りけるに

冷泉前太政大臣

池水を面をそ社曇らすもなかの秋の月

同三年八月十五夜和歌所にて月といふことを講ぜられ侍りけるに

前大納言為家

風や高石そ社水をおろすもなかのそらそよかぜ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

駒牽の今ここそ
しるへもせよ
花園院御製
面影の
夫原
前大納言為定
嬉の元年八月十五夜
後醍醐院御製
建武二年八月十五夜
後宇多院御製
雑中 納言長家
久堅の月
百首歌めされし
御製
弘安六年八月十五夜

暁風もおとづれまうでゝ秋のきたるをみるといふ事を

新元百首奉りし時

一条関大臣

いく秋もかはらぬ月の影ながら久しき世のみ恨めしきかな

元亨三年七月関叟ニ首奉りし時

雲の上我もいくよの秋ならん古のみ恨めしきかな

嫉妬の事を

大納言師賢

うつろはぬ秋の月をもうつろはぬ心ぞ人の恨めしきかな

古

左近大将冬通

あさぢふけさは浴かな秋乃月もる山もとの露をかぞへて

中宮権亮よしかね

いく秋も世をうらみて九重の雲井まで飛ぶ鹿の声かな

古

為通卿后

なみだのみ袖にしぐれてふる里の軒ばの月をみるよしもなし

大宰大弐重家

いかにもる月のかげもけさはかなしかりしそれかあらぬか

古

従二位源基氏朝臣

秋山のもみぢをそめしそのかみの月をうつせる谷川の水

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

源公忠朝臣

家くふる

雲ゐまでおくるも惜しき別れ路を
猶の今年は

富樫前雲州家服忌

うらみなきものゝあはれの秋の夜の
寛元二年九月十三夜 西園寺入道前太政
大臣家歌合

月

時

常盤井入道前太政大臣

もろともに袖をぬらすと契りおきし
四十二年百首奉

人のつらさの野の月哉

後照念院殿百首歌

夏

夏の年一時月

吹くるに秋のきざしあれてもすゞしき風の
お中納言定資

権中納言為明

とりの声を

雲もるゝ木ずゑの秋風ふけばまた
永仁元年後宇多院十首奉

時ならぬ風とや頼を
津守国助

夏の雲いかにおもひて秋風の

津守國夏

月さえてもる[illegible]

山風のゆきやはらめる夜半の窓

前大僧正實超

萬治や久米路の橋月を待

亀山院御製

久堅のそらのやえ雲さえわたる月のひかりの

順徳院御製

月前擣衣といふ事を

前參議為實

[illegible]

三河おくそのちかく

吹ちらす峯の木葉の月ハ雲

月前行風を

後京極攝政

月五十首の中

久堅の雲井の峯ゟ月さえて

前僧正道性

雲行の華ゟ吹拂ふ嵐ゟ

久安百首奉

秋の月みもあのうん秋ゟ

古

あらし吹後空ゟ流ゟ十首奉

前大納言為兼

落ちれゟ時

あくるまでそや秋の夜月ゟまちそめん

花園院御製

月はいさんとそ
まつりことをみく
も安房の許よ

冷泉

月とみるおもかけ
おく大僧正通玄

藤原為遠朝臣

源為氏朝臣

入道前太政大臣

前大納言経親

後西園寺入道前太政大臣

後

人のこころのくまなきを
ふかくこころざしてさて
ほきふるまひをよく
あらそふものなくて
さしあまのかるもを
一つきひろふも

里ちかき海のあさりをこととせて
あまをとめらのあさすなどいふ

古

せの海やなぎのもとをむすびの
おん納言為氏卿

奇合よ清月

前津清やとろ月の影
さやけしらす

源親長朝臣

なく波の旅いおれとそ
海人の浦乃旅やの苫ひ

従二位行家

津守国量

沈見浜作

左中将義孝

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

かきそうろうへうもれ木清の
人こと月十首

前中納言匡房

都原月前のやまし
春元百首

伊勢

古

津守国道

心あるそ波の関るらん
清水

源頼政朝臣

名をの乃奥津をの旅枕月新とうてよるら波
頭不知

秋の夜乃暁うき月乃雲間なく
ても猶ふけ行かたの空哉

源信明朝臣

天の原雲なき空をむら雲の
かくれ行くは月の舟かも

伊勢

いつもかは物思ふ秋乃月新
しきものと海士乃釣舟

人丸

もろもろ山人なれや秋乃月
秋毎に猶物の哀乃
増さるらん

伊勢乃集にこの歌
ともにたてまつりて
いつかはとのみ
秋をまつよりも
今宵をこそ
思ふこころ
ふかくは
侍れ

清慎公

清輔朝臣家の歌合に
寄月恋
侍従乃親

もろともにあはれと思へ山
乃端乃月
隠すな雲乃
よそ乃ゆかりも

新古今
秋歌上

秋風乃吹うらかへす葛乃葉
乃うらみても猶
恨めしき哉

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

853
166

3232

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用